

アート寺子屋 vol.2 小さな家の大きなひろがり

2014年7月12日 埼玉県立近代美術館講座室



左より青山恭之(SMF運営委員)、中村好文さん、中里和人さん、石上城行さん



建 建築家**中村好文**さんのプレゼンテーションは、金沢21世紀美術館で開催中(会期:2014年4月26日～8月31日)の展覧会「中村好文 小屋へおいでよ」において実際に制作・展示された、エネルギー自給自足をめざすひとり暮らし用の小屋「Hanem Hut」の制作過程をビデオによって表現したものでした。平面は3×4メートルの長方形。切妻の家型を支える構造は、1×2メートル角で厚みが36ミリの「Jパネル」という杉の三層構造パネルです。立原道造の「ヒアシンスハウス」や、ル・コルビュジェの「カップマルタン」の休暇小屋」などの名作の小屋には住む機能のすべてが入っていません。いっぽうで「Hanem Hut」は、たった一人で使うとしても住宅のすべての機能を凝縮しているという意欲作です。柱の一本にまでこだわった職人の技や、制作に関わったスタッフの心意気のようなものが伝わってきて、そこには小さいからこそ集中できるものづくりの世界がありました。ベッドで眠りにつくとき、小さな明かりを消したひもをくると巻きとるところまで用意されているのは脱帽でした。

写真家の**中里和人**さんは、徹底してご自身の撮影した小屋の写真の写真を次から次へと映していきました。「これ、いいでしょう!」と言いながら、ある意味なんの変哲もない小屋を愛する感性は、会場からも親近感をもって受け入れられていたようです。日本を何周もしながら小屋を追い続けたこと。「小屋の肖像」という言葉が浮かんだ時、小屋のポートレートを正面から撮るといふスタイルにたど

り着いたこと。中村さんの小屋は住む小屋なのに対し、自分が追いかけているのは住まない小屋だということ。青森には質的に見ても日本の頂点といってもいい派手な色の小屋が多いのに対し、沖縄の小屋は太陽が強く退色するためにグレーが多いこと。小屋には、日本の男のセンスが結晶しているということ。小屋は均質化していく風景の対極にあること、などなど。さらに、風景の中を移動する小屋やご自身で作る小屋、手のひらにのる小屋への思いまで、さまざまに語られました。

彫刻家の**石上城行**さんは、幼少期から青年になるころに暮らした京都で仏像を見ていたことがご自身の彫刻家への原点だったと語りはじめました。西洋の彫刻がリアルな人間を目指したのに対して、仏像に代表される日本の彫刻はイメージとしての人間をめざしたという違いを認識するにつれて、目で見つくるのをやめて記憶だけでつくることへと作風が変化してきたそうです。そして、勤務地の島根でかかわったアートプロジェクトで出会った蔵から、家型の作品に到達したということ。また、建物は記憶の入れものということから「記憶の容(かたち)」というコンセプトが生まれたということ。家の人を象徴する。家は、歩き出してもいい。」とも……。

三者の発表の後、会場を巻きこんでの議論が展開され、小屋をめぐる思考は、まさに大きな広がりをもつと実感することができました。(参加:53人)

青山恭之(SMF運営委員)

ワークショップ 住みつけてなに? —名作住宅に寄生する試み—

2014年8月16日 埼玉県立近代美術館講堂

埼

埼玉県立近代美術館で開催中の企画展「戦後日本住宅伝説—挑発する家・内省する家」(会期:7月5日～8月31日)に関連したワークショップを同館2階の講堂で開きました。企画展の内容をうけて創作体験をしてみようという親子向けのプログラムです。具体的には、企画展で展示されている名作住宅の中から自分の好きなものを選び、その空間の中に自分たちの居場所を段ボールで作ってみようという試みです。

対象は小学4～6年生までの児童と親子。住宅の空間と身体スケールを橋渡しするために、ふたつのしかけを用意しました。まずは会場となる講堂の床に、展示住宅のひとつである「中銀カプセル」(設計:黒川紀章)の平面図を寸寸で描きました。もうひとつは量の大きさの段ボールを材料とすることで、日本人にはみづかな寸法体系を実感してもらおうことです。

イントロダクションとして中銀カプセルの平面図を紹介し、段ボールに親子で寝てもらおうなどした後に展示会場へ。一般の入場者にまじってスタッフが解説するかたちで一巡し、最後には庭(北浦和公園の彫刻広場)にある実物の中銀カプセルを見て、床の平面図との関連づけをおこないました。

昼食後に本番スタートです。段ボールにはスリット(切れこみ)

が入っているの、相互にかみあわせると手軽に立体が組み上がります。それぞれに対話をとおして立ち上がっていく立体は、こちらの想像をこえてバラエティーにとんでいました。「中野本町の家」(設計:伊東豊雄)が気に入って、曲面の壁にこだわりつづけた親子。「幻庵」(設計:石山修武)の太鼓橋を苦勞して造形していった親子……。

2012年にも、段ボールで空間づくりをする子どもたちのワークショップをおこないましたが、そのときはあくまでも一人で作る空間ということと小学校低学年ということもあって、身体的スケールの家が生まれました。それに比べると、今回は住宅のスケールを見てもらったことと親子、それも家族全員チームでとりくんだ参加者もあって、規模も大きく、複数の部屋や上下に重なった空間などもあり、家と身体の間スケールで子どもたちの創造力が動いているのを感じることができました。

今日の学校教育のなかでは、「空間」そのものを題材にした図工や美術の授業が少ないのではと感じています。平面的な「画面」の世界が日常化している子供たちに、これからも空間的想像力を働かせる場を作ってあげたいと思っています。(参加:20人)

青山恭之(SMF運営委員)

